ルーブリックを活用した初年次宿泊研修の効果測定に関する試み
―聖徳大学児童学部児童学科の Freshmen Camp の取り組みから―

石川 満佐育・岡田 了祐

本研究では，2017 年度に聖徳大学児童学科で行われた Freshmen Camp（以下：FC）に焦点をあて，児童学科 FC プログラムの効果を評価するための FC ルーブリックを作成すること（研究１），作成されたルーブリックを用い，FC プログラムの効果測定を行うこと（研究２）の２点を目的とした。研究１では，12 の観点について，４段階から評価が可能となる FC ルーブリックが作成された。研究２では，新入生 309 名を対象者に，FC 実施前後の Pre 調査，Post 調査を実施し，FC プログラムの効果測定が行われた。Pre，Post 調査における FC ルーブリックの得点比較から，有意な向上がみられ，FC プログラムの有効性が示された。

キーワード：初年次宿泊研修，Freshmen Camp，効果測定，ルーブリック

【問題と目的】

１．初年次教育と初年次宿泊学研修

中央教育審議会（2008）による「学士課程教育の構築に向けて（答申）」でもみられるように，近年，わが国の高等教育において，初年次教育（First Year Experience）の重要性がますます認識されてきている[1]。この答申に呼応し，全国の大学においても，各大学の独自性を出しながら，初年次教育の導入・充実が図られ，それを学士課程全体の中で適切に位置づける取り組みが積極的に推進されている。中央教育審議会（2008）において，初年次教育は「高等学校や他大学からの円滑な移行を図り，学習および人格的な成長に向けて大学での学問的・社会的な諸経験を成功させるべく，主に大学新入生を対象に総合的に作られた教育プログラム」として説明されている。

わが国において，初年次教育への取り組みはさまざまな形で進められてきたが，そのひとつに新入生を対象とした宿泊研修があげられ，多くの大学で，「オリエンテーションキャンプ」，「フレッシュマンキャンプ」等の名称で実施されている（以下，一般化して述べる際は，これらを総称して初年次宿泊研修と表記し，先行研究について述べる際は，各報告の名称にしたがうこととする）。初年次宿泊研修は，大学進学という環境の変化に伴い生じることが危惧される生活リズムの乱れや学習意欲の低下を予防し，新入生が大学・学部で学ぶ意義を理解することや，学生間の交流を通じて人間関係を構築することを目的としていることが多い（山村・成家，2014）。

他方，近年，大学における教育の質の保証という観点から，カリキュラムや教育プログラムの開発実施に伴い，その効果測定が不可欠とされる（伊藤，2015）。初年次宿泊研修に関しても，いくつかの先行研究においてその効果の検討が行われている。林・宮本（2011）は，フレッシュマンキャンプ終了後３ヶ月半経った時点での大学生活適応・充実状況の調査を行った結果，フレッシュマンキャンプは，その後の大学生活の適応・充実に貢献する可能性を報告している。加々美・村岡・塩谷・山上（2014）は，初年次宿泊研修の受講者と未受講者において，所属大学に対するコミュニティ感覚の得点を比較した結果，受講群は未受講群に比べ有意に高い得点を示したことを報告している。また，伊藤・西垣・佐藤・栗濱・山田（2011）は，フレッシュマンキャンプ前後で情動知能測定尺度を用いて得点を比較した結果，研修後に有意に高まることを報告している。

２．初年次宿泊研修の効果測定の方法

上記のように，初年次宿泊研修について一定の効果が示されているが，効果測定については多様な方法によって検討が行われている。これまでの先行研究における効果測定の検討方法を整理すると，質問紙調査（アンケート調査）を実施している点は共通しているものの，その内容，実施時期において以下の３つに大別できる。第一は，初年次宿泊研修実施後に質問紙調査を実施して効果を検討する方法である。この方法では，質問紙の内容によって，さらに２つに分けられ，研修目的に合った心理測定尺度を用いて質

問紙を構成する方法と，自由記述式や単一の項目群によって質問紙を構成する方法がある（例えば，阿部他，2013）。第二は，初年次宿泊研修実施前後に質問紙調査を実施し，得点の比較によって効果を検討する方法である。この方法では，伊藤他（2011）のように心理測定尺度を用いた質問紙で構成されることが多い。第三は，初年次宿泊研修実施前後だけでなく，数カ月後に別指標も加えた質問紙調査を実施し，長期的な視点から効果を検討する方法である（例えば，林，2016；山村・成家，2014）。

初年次宿泊研修の効果測定の方法について概観したが，効果の指標として心理測定尺度を用いる方法は，初年次宿泊研修に限らず一般的に用いられる方法である。従来の心理測定尺度を用いた研究では，得点の高低，あるいは，得点比較の結果，得点の上昇がみられるかについて，統計的手法を用いて検討されている。しかし，心理測定尺度を用いて行う効果測定は，測定される構成概念の指標を用いて，プログラム等の評価を間接的に行っているものと考えられる。初年次宿泊学習のような教育プログラムにおいて目標，ねらいが設定されている場合，目標に準拠した評価を行うことが重要であり，その到達度を考慮した効果の検討を行う必要がある。そこで，本研究では，近年，目標に準拠した評価が可能となるルーブリックを用いて，初年次宿泊研修の効果を測定することを試みる。

今日，パフォーマンスの効果的な評価とその評価を通した学びへの活用に有効とされるルーブリックが，初年次教育における学びを展開する上で注目されている（山田・岩崎・森・田中，2016）。ルーブリックとは「成功の度合いを示す数段階程度の尺度と，尺度に示されたレベルのそれぞれに対応するパフォーマンスの特徴を記した記述語からなる評価基準表」のことである（西岡・田中，2009）。また，中央教育審議会（2011）では，ルーブリックを『「目標に準拠した評価」のための「基準」つくりの方法論であり，学生が何を学習するのかを示す評価規準と学生が学習到達しているレベルを示す具体的な評価基準をマトリクス形式で示す評価指標』と説明している。ルーブリックと先行研究で実施されている方法論を組み合わせることで，初年次宿泊研修の目標と評価が一体化した効果測定が可能性になると考えられる。これまで，初年次宿泊学習の効果について，ルーブリックを用いて検討している研究は，著者らの知る限り見当たらない。そのため，初年次宿泊学習を評価するためのルーブリックの作成が必要とされるが，本研究では，筆者らが所属する聖徳大学児童学部児童学科（以下，児童学科）で行われる Freshmen Camp（以下：FC）におけるルーブリックの作成を試みる。

３．聖徳大学における Freshmen Camp について

聖徳大学の初年次教育のひとつに初年次教育研修として実施されている FC がある。FC とは，入学直後の４月に学部ごとに実施される宿泊研修（２泊３日，於：箱根）であり，新入生全員が原則参加する全学的な取り組みである。その目的は下記のように示されている。

１．建学の精神「和」を理解し，礼節について学ぶ機会とする。
２．大学の学びへの転換が早期に可能になるよう，自己の学習スタイルを身につけるとともに，卒業時の自分を描く機会とする。
３．お互いを認めあうことの大切さを理解し，クラスを超えた相互の信頼関係を深める。

濱名（2006）は，初年次教育の内容を次のようにまとめている。①大学生活への適応（大学生活，学習，対人関係等），②大学で必要な学習技術の獲得（読み，書き，批判的思考力，調査，タイムマネジメント），③当該大学への適応，④自己分析，⑤ライフプラン・キャリアプランつくりへの導入，⑥学習目標・学習動機の獲得，⑦専門領域への導入。これらの内容は，初年度教育の目的と解釈できるが，上記の FC の目的は重なる点が多い。したがって，本研究では，本学の初年次教育の中でも FC を対象として検討していくこととする。また，本学の FC の中でも，筆者らが所属する児童学科の FC に焦点化して本研究を進めていく。

４．本研究の目的

本研究では，児童学科 FC プログラムの効果を評価するためのルーブリック（以下：FC ルーブリック）を作成することを第１の目的とする（研究１）。次に，作成されたルーブリックを用いて，FC プログラムの効果測定を行うことを第２の目的とする（研究２）。具体的には，問題と目的で述べた初年次宿泊研修の効果測定の方法を鑑み，FC 実施前後にルーブリックを含む質問紙調査を実施し，その効果を検討する。

上記の検討を行うことによって，初年次宿泊学習の効果をルーブリックという新たな指標から検討することが可能となり，より効果的な学生支援につなげるための基礎資料を提供できると考えられる。

【研究１】

１．目的

児童学科における FC プログラムの効果を測定するためのルーブリックを作成することを目的とする。

Table 1　児童学科FCコース別プログラムの概要

	幼保	小教	心理	文化
プログラム１ 120分 （1日目午後）	(・開講式) ・クラス別交流（アイスブレーキング，関係づくりゲーム, 自己紹介等）			
プログラム２ 120分 （1日目午後）	大学生としての学びを考える ・ノートの取り方を考える 乳幼児保育者の専門性について考える ・幼稚園・保育所・こども園の説明 ・幼稚園・保育所・こども園の比較 大学生活について考える ・カリキュラムマップの説明 ・先輩達からのメッセージ映像を視聴	学級づくりの意義 ・学級づくりの意義や配慮点を考える 教師像について考える ・教師を目指す理由を考える(個人) ・理想の教師像について考える(班) ・「求められる教師像」を理解する 目指す教師像を描く ・班ごとに目指す教師像を発表する	大学生としての学びのあり方 ・ノートテイクの方法を学ぶ 児童学の実践と理論を学ぶ	大学生としての学び方を学ぶ① ・自らが考えるノートの取り方 児童文化コースの特徴を理解する
プログラム3 170分 （2日目午前）	大学生活への期待と見通しをもつ ・グループワークによって，大学生活で「頑張りたいこと」，「不安なこと」について考える	大学の学びについて考える ・高校での学びと大学の学び ・4年間の学習ビジョン ・レポートの書き方 小教コースの一体感の構築 ・生活の心構えを考える	児童心理コースへようこそ ・児童心理コースの概観 ・心理学研究法の体験	大学生活への期待と見通しをもつ ・マインドマップの作成 ・カリキュラムマップの説明 ・卒業生の活躍を知る ・4年間の大学生活の目標と計画 大学生としての学び方を学ぶ② ・ワークショップの体験
プログラム4 120分 （2日目午後）	乳幼児期にふさわしい遊びを考えて発表 なりたい幼稚園教員・保育士像を具体的にイメージしながら大学の学びをどのようにしていきたいかを考える	教職への夢を描く ・教職についている先輩の姿 ・4年後の自分の姿 ・明日からの自分	キャリアデザインのスタート ・４年間の学生生活の見通し ・卒業後の先輩の姿に学ぶ ・なりたい自分，そのための計画	(続)大学生としての学び方を学ぶ② ・ワークショップの体験 FCの学びの振り返り

注：各コースのプログラム資料を著者らが整理し作成した。

Table2　ルーブリック作成過程における観点とその説明の整理

観点	評価の視点（観点の説明）
意欲・態度群	
1　大学生活への動機づけ	大学生活全般への動機づけ（やる気・意欲）において質的な向上がみられるか
2　大学の学びへの動機づけ	大学での学びへの動機づけ（やる気・意欲）において質的な向上がみられるか
3　将来の進路への動機づけ	将来の進路への動機づけ（やる気・意欲）において質的な向上がみられるか
4　大学生としての意識	高校生から大学生への転換が質的になされているかどうか
能力・スキル群	
5　自己学習スキル	自分が身につけている学習方法（スキル）について質的な向上がみられるか
6　合意形成スキル	他者との協調，合意形成を行うためのスキルについて質的な向上がみられるか
7　自己管理スキル	マナー等も含め，集団行動を行うためのスキルについて質的な向上がみられるか
8　目標設定スキル	将来設計も含め，目標設定を行うためのスキルについて質的な向上がみられるか
理解群	
9　自己理解	FCの活動を通して自己理解について質的な向上がみられるか
10　他者理解	FCの活動を通して他者理解について質的な向上がみられるか
11　聖徳大学への理解	FCの活動を通して聖徳大学の理解について質的な向上がみられるか
12　コースへの理解	FCの活動を通して自分の所属するコースについて質的な向上がみられるか

２．方法

（1）FC プログラムの概要

2017 年度の児童学科は，幼稚園教員・保育士養成コース（以下，幼保），小学校教員養成コース（以下，小教），児童心理コース（以下，心理），児童文化コース（以下, 文化）の４コースからなり，幼保コースが４クラス，それ以外は１クラスの計８クラスで編成される。児童学科の FC プログラムは，学科全体で実施するプログラムとコースごとに実施するプログラム（以下:コース別プログラム）に大別される。前者は，開講式（１日目），地域探訪（２日目），箱根彫刻の森美術館見学（３日目）が該当する。後者のコース別プログラムでは，コースごと，あるいはクラスごとにプログラムが行われる。コース別プログラムの内容は, FC の目的, コースの特徴に応じて，各コースの FC 委員を中心に設計された。2017 年度のコース別プログラムの概要を Table １に示す。

コースごと名称や実施順序は多少異なるものの，FC の目的に即して，各プログラムの内容は同様の構成がなされている。主なものとして,「クラスメイトとの交流」「大学での学び方（大学生の学びを考えることやノートの取り方など)の習得」「専門領域への導入」「コースの特色を再確認」「将来像の構築」「(将来に向けた）大学生活の検討」といった内容である。実施にあたっては，講義，ワークショップ，グループワーク，個人学習など，多様な方法で実施された。

（2）FC ルーブリックの作成過程

まず，著者２名が協議の上，FC ルーブリックの原案を作成した。原案作成手順は次のとおりである。

はじめに，FC の目的，各コースプログラムのねらいに加え，初年度教育の目的も考慮したうえで，FC の成果として得られる内容を評価の観点として抽出した。検討を繰り返した結果，最終的に 12 の観点に整理した（Table ２)。次に，その 12 の観点に関して，共通項で括り，３つの群に整理した。その上で，12 の観点に対する説明を記述し，評価の視点とした。

次に，12 の観点に対して，４段階の評価基準を設定した。まず，各観点に対して到達目標（各観点の到達点）を設定し，それを「３」のレベルとした。次に,「３」を基準に，＋α がある状態として「４」のレベルを，到達点にはやや及ばない状態として「２」のレベルを設定し，各レベルの状態を記述した。そして,「２」を基準に，最も低次のレベルとして「１」を設定し，そのレベルの状態を記述した。ここでは,「２」や「１」であっても「できない」という表記は避け,「できる」という表記になるよう留意した。また,「１」から「４」までの連続性・段階性を配慮した記述を心がけた。

上記の手順で作成された原案を，児童学科の FC 委員会で検討し, 加筆, 修正を行い最終版が作成された（Table ３）

Table 3 2017年度児童学科FCルーブリック

項目	評価			
	1	2	3	4
大学生活への動機づけ サークル活動，委員会活動，ボランティア活動など大学生活全般についてのやる気や意欲	これから始まる4年間の大学生活を想像し，漠然とした（なんとなく）関心をもつことができる。	これから始まる4年間の大学生活を想像し，漠然とした（なんとなく）やる気や意欲をもつことができる。	これから始まる4年間の大学生活の具体的な内容に対して，やる気や意欲をもつことができる。	これから始まる4年間の大学生活の具体的な内容に対して，やる気や意欲をもち，実際にどう行動するかの見通しを立てることができる。
大学の学びへの動機づけ 大学での授業など大学での学びについてのやる気や意欲	これから始まる4年間の大学での学びを想像し，漠然とした（なんとなく）関心をもつことができる。	教師像について考える ・教師を目指す理由を考える(個人) ・理想の教師像について考える(班) ・「求められる教師像」を理解する	これから始まる4年間の大学での学びの具体的な内容に対して，やる気や意欲をもつことができる。	これから始まる4年間の大学での学びの具体的な内容に対して，やる気や意欲をもち，実際にどう行動するかの見通しを立てることができる。
将来の進路への動機づけ 自分の将来の進路へのやる気や意欲	自分の将来の進路を想像し，漠然とした（なんとなく）関心をもつことができる。	人生の夢について考える ・高校での学びと大学の学び ・4年間の学習ビジョン ・レポートの書き方 小教コースの一体感の構築 ・生活の心構えを考える	自分の将来の進路の具体的な内容に対して，やる気や意欲をもつことができる。	自分の将来の進路の具体的な内容に対して，やる気や意欲をもち，実際にどう行動するかの見通しを立てることができる。
大学生としての意識 自分が大学生であるということを自覚についての意識	乳幼児期にふさわしい遊びを考えて発表 なりたい幼稚園教員・保育士像を具体的にイメージしながら大学の学びをどのようにしていきたいかを考える	自分が大学生であるということを自覚し，これまでの自分とは何らかの形で変わろうとしている。	自分が大学生であるということを自覚し，今後のあるべき自分の姿を明確化して変わろうとしている。	自分が大学生であるということを自覚し，今後のあるべき自分の姿やそのために具体的にすべきことを明確化して変わろうとしている。
自己学習スキル 学びを自分のためにする力	教員や他者の話に対して，指示がでた内容をメモすることができる。	教員や他者の話に対して，自らメモを取り，内容の理解に役立てることができる。	教員や他者の話に対して，自ら要点を まとめてメモを取り，内容の理解に役立てるとともに，後の学習に活かすことが できる。	教員や他者の話に対して，自ら要点をまとめることに加え，疑問点，質問する内容等もメモをとることができ，内容の理解に役立てるとともに，後の学習に活かすことができる。
合意形成スキル 他者と合意形成（意見の一致を図ること）ができる力	自分とは違う他者の考えがどのようなものかを明確化することができる。	自分とは違う他者の考えがどのようなものかを明確化すると同時に，自身の考えと比較し，共通点と相違点を明確化することができる。	自分とは違う他者の考えと自身の考えとを比較し，共通点と相違点を明確化した上で，合意形成（意見の一致を図ること）ができる。	自分とは違う他者の考えと自身の考えとを比較し，共通点と相違点を明確化した上で，合意形成（意見の一致を図ること）し，他者とともに新たなものを創出することができる。
自己管理スキル 時と場所，場合に応じた方法，態度，服装等の使い分け，他者を意識して行動する力	時と場所，場合に応じた方法，態度，服装等の使い分けがあることを知っている。	時と場所，場合に応じた方法，態度，服装等の使い分けがあることを知っており，実際にそれを守ることができる。	時と場所，場合に応じた方法，態度，服装等の使い分けを守ることができ，それを踏まえて，他者を意識して行動することができる。	時と場所，場合に応じた方法，態度，服装等の使い分けを守ることができ，それを踏まえて，他者を意識してよりよい方向にするために集団に働きかけることができる。
目標設定スキル ある課題に対して，目標を設定し、それにむかって行動する力	ある課題に対して，目標を設定し，そこに至る計画を立てるができる。	ある課題に対して，目標を設定し、過程を進んでいく自分を想定しながら，やるべきことを明確にすることができる。	ある課題に対して，目標を設定し、過程を進んでいく自分を想定しながら，やるべきことを明確にし，それにむかって行動することができる。	ある課題に対して，目標を設定し、過程を進んでいく自分を想定しながら，やるべきことを明確にし，必要な修正や調整を柔軟に行いながら着実に実行していくことができる。
自己理解 自分自身への理解	自分の好み，性格，能力を漠然と把握し、自分の傾向をふまえて行動することができる。	自分の好み，性格，能力を把握し，長所や短所をふまえて行動することができる。	自分の好み，性格，能力を把握し，長所や短所をふまえて，客観的に自分の言動をコントロールすることができる。	自分の好み，性格，能力を把握し，集団内における自分の適材適所な役割を見極め，力を発揮することができる。
他者理解 クラスの友達の考え方への理解	クラスの友達について，その存在を把握し，漠然と(なんとなく)特徴を理解している。	クラスの友達について，どのような考えを持っているか理解している。	クラスの友達の考え方を共感的，肯定的に受け入れることができる。	クラスの友達の考え方を把握した上で，目標を共有しながら，それに向かって協同することができる。
聖徳大学への理解 聖徳大学の「自立するチカラを育む女性総合大学」というテーマ，建学の精神「和」の意味の理解	本学のもつ特色を漠然と(なんとなく)理解している。	本学が育てようとしている具体的な学生像を理解している。	「自立するチカラを育む女性総合大学」というテーマとそれを具現化する建学の精神「和」の意味を理解している。	「自立するチカラを育む女性総合大学」というテーマとそれを具現化する建学の精神「和」の意味を理解し，日々の生活の中で実践しようとすることができている。
コースへの理解 自分の所属コースに対しての理解	コースが育てようとしている学生像（目標）を漠然と(なんとなく)理解している。	コースが育てようとしている学生像（目標）を具体的に理解している。	目標を達成するために，どのようなカリキュラムとなっているかということを理解している。	建学の精神，3つのポリシー，そして，コースの目標とそれを達成するためのカリキュラムの関係を理解している。

【研究２】

１．目的

研究１で作成されたFCルーブリックを用いて，FCプログラムの効果を検討することを第１の目的とする。具体的には，FC実施事前調査（以下:Pre調査），事後調査（以下：Post調査）を実施し，FCルーブリック得点の比較を行う。また，作成されたルーブリックの評価基準において一定の到達点（レベル３）を設定している以上，基準に到達したか否かの点から効果を検討する必要があると考えられ，評価項目ごとに基準到達者の比較を行う。

次に，Pre調査，Post調査の結果と大学志望度との関連を検討することを第２の目的とする。第１志望の大学への合否は，その後の大学への満足度や適応感を予測することが示されているため（大隅他，2015），FCの効果と大学志望度との関連について検討する。

２．方法

（1）調査対象者

2017年度聖徳大学児童学部児童学科に入学した女子大学生355名（全て１年生）を対象とした[2]。

（2）質問紙調査実施の手続き

Pre調査は，FC実施３～５日前の講義時に実施した。Post調査は，FC実施５～７日後の講義時に実施した。各調査ともクラス単位の講義時に実施したため，調査時期に若干の誤差がある。Pre調査，Post調査における対象者の同定は，学籍番号によって行った。

（3）倫理的配慮

調査対象者に，調査依頼文において調査の目的や内容，分析処理方法，プライバシーの保護についての説明を行い，任意の調査協力の同意を得た。なお，本研究実施においては「聖徳大学ヒューマンスタディに関する倫理審査委員会」の審査を受け，承認を得ている。

（4）Pre，Post 調査における質問紙の内容

① FC ルーブリック：研究１で作成されたルーブリック評価 12 項目を用いた。

② FC の充実度（１項目）:「FC に参加して達成感，充実感はどの程度得られましたか」という問いに対し，「ほとんどない（１点)」～「非常にあった（５点)」の５件法で回答を求めた。

③大学志望度（１項目）: Post 調査においてのみ実施した。千島･水野（2015）で使用された項目を用いた。「現在通っている大学は，大学受験時に第１志望だった大学ですか」という項目に対し，「１．はい」,「２．いいえ」の２択で回答を求めた。

３．結果と考察

（1）分析対象者

355 名のうち各調査に回答した人数は Pre 調査 349 名（98.3%），Post 調査 348 名（98.0%）であった。２回調査すべてに回答したものを抽出し，そのうち，欠損値を含むデータを全て除外した結果, 309 名が分析対象とされた（有効回答率 87.0%）。なお，分析には SPSS ver.25 を用いた。

（2）FC 実施前後のルーブリック評価項目得点の比較

FC 実施前後のルーブリック評価項目得点の比較を行うために，各項目について Wilcoxon の符号付順位和検定を行った[3]。その結果，12 項目全てにおいて有意な差がみられ，Post 得点のほうが Pre 得点よりも得点が高かった（Table ４）。また，効果量の検討では 0.44 ～ 0.62 の値が得られ[4]，中程度以上の効果量が示された[5]。

Table 4　FC実施前後におけるFCルーブリック評価項目の得点比較（n=309）

No	項目	Pre		Post		Z値	p 値	ES
		M	*SD*	*M*	*SD*			|r|
1	大学生活への動機づけ	2.30	(0.71)	2.80	(0.73)	8.79	0.00 ***	0.50
2	大学の学びへの動機づけ	2.45	(0.64)	2.86	(0.67)	8.40	0.00 ***	0.48
3	将来の進路への動機づけ	2.58	(0.73)	2.98	(0.72)	7.64	0.00 ***	0.44
4	大学生としての意識	2.21	(0.76)	2.86	(0.76)	9.86	0.00 ***	0.56
5	自己学習スキル	2.06	(0.71)	2.70	(0.73)	10.61	0.00 ***	0.60
6	合意形成スキル	2.06	(0.76)	2.70	(0.79)	9.85	0.00 ***	0.56
7	自己管理スキル	2.45	(0.75)	2.94	(0.74)	8.57	0.00 ***	0.49
8	目標設定スキル	2.14	(0.75)	2.71	(0.74)	9.16	0.00 ***	0.52
9	自己理解	2.30	(0.80)	2.77	(0.75)	8.33	0.00 ***	0.48
10	他者理解	2.07	(0.96)	2.83	(0.86)	9.66	0.00 ***	0.55
11	聖徳大学への理解	2.04	(0.75)	2.69	(0.76)	10.37	0.00 ***	0.59
12	コースへの理解	2.15	(0.76)	2.83	(0.75)	10.80	0.00 ***	0.62

注1：*** ; p<.001

次に，基準到達を指標として Pre 調査，Post 調査の変化を検討するために，各項目の基準到達者の人数比を比較した。Pre 調査，Post 調査の各 FC ルーブリック評価基準（ルーブリックの各項目）について，４段階の到達レベルにおいて基準到達者（各項目で 3.00 点以上）の人数を算出した結果を Table ５に示す。次に，FC 実施前後の基準到達者の割合を McNemar 検定によって比較したところ，12 項目すべてについて基準到達者が有意に上昇していた（p ＜ .001）。

Table 5　各FCルーブリック評価基準における基準到達者の人数比（n=309）

No	Pre達成者		Post達成者		p 値
	n	%	*n*	%	
1 大学生活への動機づけ	118	38.19	224	72.49	0.00 ***
2 大学の学びへの動機づけ	145	46.93	230	74.43	0.00 ***
3 将来の進路への動機づけ	176	56.96	243	78.64	0.00 ***
4 大学生としての意識	109	35.28	226	73.14	0.00 ***
5 自己学習スキル	75	24.27	197	63.75	0.00 ***
6 合意形成スキル	88	28.48	195	63.11	0.00 ***
7 自己管理スキル	151	48.87	241	77.99	0.00 ***
8 目標設定スキル	94	30.42	206	66.67	0.00 ***
9 自己理解	127	41.10	216	69.90	0.00 ***
10 他者理解	117	37.86	229	74.11	0.00 ***
11 聖徳大学への理解	74	23.95	196	63.43	0.00 ***
12 コースへの理解	102	33.01	227	73.46	0.00 ***

注1：*** ; p<.001

以上，Pre 調査，Post 調査において，FC ルーブリックの各評価基準得点は有意な上昇がみられ，また，各評価基準の基準到達者も有意に上昇していたことから FC プログラムは，学生の動機づけ，スキルの向上，所属大学，コースの理解を向上させることに寄与することが示された。特に，得点差が大きく，基準達成者の割合が高かった観点は，自己学習スキル，コースへの理解，聖徳大学の理解，大学生としての意識，他者理解であり，学生の自己評価において，FC の目的が達成されたといえるであろう。

（3）Post 調査におけるルーブリック基準到達項目数の算出

FC ルーブリックの基準到達の全体的な傾向を把握するために，基準到達項目数の算出を行った。基準到達項目数とは，本研究で作成されたルーブリックの 12 の観点において，基準に到達した観点の数を合算した変数である。Post 調査の基準到達項目数が多ければ，全体的に FC の目標が達成されたことになり，FC の効果が高いことを意味する。

まず，Table ５に示した Post 調査における各評価観点（ルーブリックの項目）について, 基準を到達した項目（3.00 点以上）の数を合算し，各対象者の「基準到達項目数」を算出した（最小値０，最大値 12)。「基準到達項目数」の度数分布を Table ６に示す。また，基準到達項目数と FC の充実度との相関を Spearman の順位相関係数によって検討した結果，rs = .14（p = .020；p ＜ .05）の値が得られ，弱い正の相関関係が示された。

以上，多くの学生がすべての観点で基準に到達している

（12 個；33%）一方で，人数は少ないものの，０個（5.5%），１個（2.9%），２個（3.6%）と基準達成項目数が少ない学生がいることが示された点は留意する必要があろう。

Table 6　FC実施後の基準到達項目数の度数（n=309）

個数	0個	1個	2個	3個	4個	5個	6個
度数（n）	17	9	11	8	10	9	18
%	5.5	2.9	3.6	2.6	3.2	2.9	5.8
累積%	5.5	8.4	12.0	14.6	17.8	20.7	26.5
個数	7個	8個	9個	10個	11個	12個	合計
度数（n）	19	25	21	24	36	102	309
%	6.1	8.1	6.8	7.8	11.7	33.0	100.0
累積%	32.7	40.8	47.6	55.3	67.0	100.0	

（4）大学志望度からみた FC の効果の検討

大学志望度の回答から「はい」と回答したものを「第１志望群」（n=216，70%），「いいえ」と回答したものを「第１志望以外群」（n=93，30%）とした。大学志望度の２群を独立変数，Pre，Post 調査の FC ルーブリックの得点を従属変数とした Mann-Whitney の U 検定を行った（Table ７）。その結果，Pre 調査では，大学生活への動機づけ，聖徳大学への理解において有意な差がみられ，第１志望群のほうが第１志望以外群よりも得点が高かった。また，大学の学びへの動機づけ，将来の進路への動機づけ，コースへの理解において有意傾向がみられ，第１志望群のほうが第１志望以外群よりも得点が高かった。Post 調査では，有意な差がみられなかった。

以上の結果から，Pre 調査では，５つの評価基準において有意な差，あるいは有意傾向がみられたものの，Post 調査では，全ての項目で有意な差がみられなかった。Pre 調査で有意な差，有意傾向がみられた評価基準は動機づけに関する３項目と聖徳大学への理解，コースへの理解に関する項目であり，第１志望群で得点が高くなった。第１志望以外群は，端的にいえば不本意入学者となるが，従来不本意入学は学習意欲が低く，当該大学への理解も十分でないことが指摘されており（竹内，2014），Pre 調査の結果と一致する。一方，Post 調査では全ての項目で有意な差がみられなかったことから，FC プログラムは不本意入学者にとって大学の学びへの動機づけを高めることに寄与する可能性が示唆されたといえる。

【総合的考察】

本研究では，児童学科 FC プログラムの効果を評価するための FC ルーブリックを作成することが第１の目的であった（研究１）。次に，研究１で作成されたルーブリックを用い，FC プログラムの効果測定を行うことが第２の目的であった（研究２）。

研究１では，12 の評価の観点について，４段階から評価が可能となる FC ルーブリックが作成された。FC ルーブリックは，本学児童学科用に作成されたという点で一般化には限界があるが，従来，初年次宿泊研修の効果測定において，ルーブリックによる評価は行われていない中で，初年次宿泊研修に特化したルーブリックが作成されたことは成果といえるであろう。

一方，ルーブリックは作成されたものの，本研究で作成されたルーブリック自体の評価は行われていない。教職員，学生にとってわかりやすいものだったか，などルーブリックの内容に関する評価や，FC に参加するにあたり，実際にルーブリックの観点, 基準を意識したかどうか, などルーブリック活用の意識に関する評価については検討が行われていない。今後は，作成された FC ルーブリック自体の評価について検討を行い，より有用なものに修正していく必

Table 7　志望順位別のPre調査，Post調査におけるFCルーブリック評価項目の得点（n=309）

No	項目	Pre							Post						
		第1志望 n=216		第1志望以外 n=93		Mann-Whitney の U	p 値	ES |r|	第1志望 n=216		第1志望以外 n=93		Mann-Whitney の U	p 値	ES |r|
		M	SD	M	SD				M	SD	M	SD			
1	大学生活への動機づけ	教師像につい	(0.70)	2.16	(0.71)	8754.50	0.04 *	0.11	2.81	(0.74)	2.77	(0.71)	9734.50	0.63 *n.s.*	0.03
2	大学の学びへの動機づけ	2.50	(0.63)	2.32	(0.66)	8776.00	0.05 †	0.11	2.87	(0.66)	2.83	(0.69)	9749.50	0.64 *n.s.*	0.03
3	将来の進路への動機づけ	大学の学びに	(0.72)	2.45	(0.74)	8859.50	0.07 †	0.10	3.00	(0.72)	2.95	(0.74)	9771.00	0.67 *n.s.*	0.03
4	大学生としての意識	2.25	(0.79)	2.12	(0.70)	9148.50	0.18 *n.s.*	0.08	2.83	(0.74)	2.92	(0.81)	9319.50	0.27 *n.s.*	0.06
5	乳幼児期にふさわしい遊びを考えて発表	2.08	(0.72)	1.99	(0.70)	9470.50	0.38 *n.s.*	0.05	2.70	(0.74)	2.69	(0.71)	9913.50	0.84 *n.s.*	0.01
6	合意形成スキル	2.06	(0.75)	2.05	(0.80)	9957.00	0.90 *n.s.*	0.01	2.71	(0.80)	2.67	(0.77)	9712.50	0.62 *n.s.*	0.03
7	自己管理スキル	2.50	(0.77)	2.34	(0.70)	8978.50	0.11 *n.s.*	0.09	2.94	(0.73)	2.95	(0.77)	9901.50	0.82 *n.s.*	0.01
8	目標設定スキル	2.17	(0.75)	2.08	(0.74)	9473.00	0.39 *n.s.*	0.05	2.68	(0.75)	2.76	(0.71)	9542.00	0.44 *n.s.*	0.05
9	自己理解	2.34	(0.78)	2.23	(0.86)	9347.00	0.30 *n.s.*	0.06	2.74	(0.76)	2.85	(0.72)	9300.00	0.25 *n.s.*	0.07
10	他者理解	2.09	(0.97)	2.03	(0.93)	9765.00	0.68 *n.s.*	0.02	2.80	(0.86)	2.90	(0.85)	9416.50	0.34 *n.s.*	0.06
11	聖徳大学への理解	2.10	(0.74)	1.90	(0.74)	8635.00	0.03 *	0.12	2.66	(0.78)	2.75	(0.72)	9340.50	0.29 *n.s.*	0.06
12	コースへの理解	2.20	(0.75)	2.02	(0.75)	8883.00	0.08 †	0.10	2.80	(0.75)	2.89	(0.76)	9286.50	0.24 *n.s.*	0.07

注1：* ; p<.05，† ; p<.10，*n.s.* ；有意差なし

要があろう。

また，学生にルーブリックの調査を実施する際の教示方法には課題があったと考えられる。FC 実施前の Pre 調査を行う際に，ルーブリックの説明，評価基準の説明を十分に行うことができなかった。鈴木（2011）は，ルーブリックを，評価の実施者と受け手が評価目的と評価基準を共有する有用なツールである，と述べている。調査実施時には，ルーブリックの評価目的，評価基準を明確に学生に教示することによって，FC の目的をより意識させることが可能になると考えられるため，ルーブリック評価を行う際の教示方法については，今後の課題としたい。

研究２では，309 名を分析対象者として，FC 実施前後の Pre 調査，Post 調査を実施し，FC プログラムの効果測定が行われた。ここでは，本研究の結果を基に，学生への支援という点から考察を述べていきたい。

FC 実施前後の FC ルーブリック得点の比較，ならびに，基準到達者の比較から，有意な向上がみられた。このことから，FC プログラムは，大学生活への意欲，動機づけを高め，大学生活で必要となるスキルの向上に寄与し，自他の理解，大学，コースの理解を促進することが示された。

FC プログラムについて，学生の自己評価において全体的にみれば効果が示されたといえるであろう。しかし，本研究で作成されたルーブリックの基準達成者の割合をみると，12 の観点によって多少異なるが，概ね６割強～８割強となった。逆を言えば，２割～３割の学生は，何らかの観点において基準を達成していないということになる。到達目標がある以上，基準達成者の割合をより増やしていくことが必要であろう。そのためには，先述したように，Pre 調査においてルーブリックを実施する際に評価基準を学生に示し，到達目標を目指すよう意識づけを行うことや，プログラムの修正を行い，ルーブリックの評価基準を意識した内容にしていくことが，今後の課題といえるであろう。

また，問題と目的で述べたように，初年次教育，初年次宿泊学習は，学生の大学適応を促進し，意欲の低下を予防するために行われるのであれば，FC がその後の大学生活にどのような影響を与えているのかを検討する必要があろう。実際，多くの先行研究では，今後の課題として長期的な影響の検討が必要とされている（脇本，2013）。長期的な影響を検討するためには，FC 実施前後の効果測定だけではなく，数カ月の期間をあけて質問紙調査を実施する縦断研究デザインによる検討を行う方法が考えられる。あるいは，FC 実施前後の FC ルーブリック評価の結果を基に，各観点の到達に至らなかった学生を抽出し，個別事例的な検討を行うことによって，より適切な支援につなげていくことが可能になると考えられる。

最後に，本研究の結果に基づいて，初年次宿泊学習の効果測定の方法として，ルーブリック活用の有効性について述べる。初年次教育の効果測定において，既にルーブリック評価が導入されているが，本研究から，初年次教育のひとつとされる初年次宿泊研修においてもルーブリック評価は有効であることが示された。心理測定尺度を用いる検討方法との単純な比較はできないものの，実施する教育プログラムの目標が明確な場合にはルーブリックを用いた検討を行うことで，目標に準拠した評価が可能になることが示されたといえる。また，本研究は学生の自己評価に基づく検討から効果測定を行ったが，ルーブリックが作成されたことによって他者評価も可能になったと考えられる。今後は，学生の自己評価だけでなく，他者評価の視点もふまえた効果測定を検討することで，より客観的な FC の効果測定につながると考えられる。

総合的考察では，多くの課題も述べられた。初年次宿泊学習においてルーブリックを用いた効果測定の検討はほとんど行われていない中，今後も分析方法等を検討するとともに，学生にとってより有益な FC プログラムの在り方について検討を進めていきたい。

【謝辞】

調査にご参加いただいた学生の皆様に御礼申し上げます。また，児童学科の FC 実施，本研究の調査にあたりご協力いただいた教職員の皆様に深く御礼申し上げます。

【引用文献】

阿部 篤志・藤本 晋也・山内 亨・粟木 一博・齋藤 博・高成田 享・高橋 義夫・石丸 出穂（2013）. 初年次教育における「フレッシュマンキャンプ」の意義と課題――スポーツ情報マスメディア学科の取り組みから―― 仙台大学紀要 , 45, 21-34.

千島 雄太・水野 雅之（2015）. 入学前の大学生活への期待と入学後の現実が大学適応に及ぼす影響――文系学部の新入生を対象として―― 教育心理学研究 , 63, 228-241.

中央教育審議会（2008）. 学士課程教育の構築に向けて（答申）Retrieved from http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/__icsFiles/afieldfile/2008/12/26/1217067_001.pdf（2018 年２月 20 日）

中央教育審議会（2011）. 中教審大学教育部会濱名委員説明資料 Retrieved from http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo 4 /015/attach/1314260.htm（2018 年２月 20 日）

濱名 篤（2006）. 中央教育審議会大学分科会大学教育部会 初年次教育の現状と課題――“移行”問題を中心に―― Retrieved from http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo 4 /015/gijiroku/07012325/003.pdf（2018 年 2 月 20 日）
林 綾子（2016）. 初年次教育としてのフレッシュマンキャンプが大学適応に及ぼす影響 びわこ成蹊スポーツ大学研究紀要 , 13, 81-84.
林 綾子・宮本 友弘（2011）. フレッシュマンキャンプと大学生活適応に関する研究　研究紀要 , 8, 93-99.
伊藤 創（2015）. 米国 IR データの活用についての調査報告――ジョージア州立大学での視察から――教育総合研究叢書 , 8, 59-67.
伊藤 守弘・西垣 景太・佐藤 枝里・栗濱 忠司・山田 公夫（2011）. フレッシュマンキャンプの効果 : 情動知能の観点から 中部大学教育研究 , 11, 75-79.
加々美 智光・村岡 智子・塩谷 亨・山上 史野（2014）. 初年次宿泊研修の効果を学生の所属大学へのコミュニティ感覚を用いて測定する試み 工学教育研究 , 21, 177-189.
水本 篤・竹内 理（2008）. 研究論文における効果量の報告のために : 基本的概念と注意点 関西英語教育学会紀要「英語教育研究」, 31, 57-66.
西岡 加名恵・田中 耕治（2009）.「活用する力」を育てる授業と評価 学事出版
大隅 香苗・小塩 真司・小倉 正義・渡邉 賢二・大崎 園生・平石 賢二（2016）. 大学新入生の大学適応に及ぼす影響要因の検討――第 1 志望か否か，合格可能性，仲間志向に注目して――　青年心理学研究 , 24, 125-136.
鈴木 雅之（2011）. ルーブリックの提示による評価基準・評価目的の教示が学習者に及ぼす影響　教育心理学研究 , 59, 131-143.
竹内 正興（2014）. 大学入試構造と不本意入学者のアイデンティティ――AO 入試は不本意入学者を減少させる施策となりえるのか――　佛教大学大学院紀要 . 教育学研究科篇 , 42, 35-51.
山田 嘉徳・岩﨑 千晶・森 朋子・田中 俊也（2016）. 初年次教育での学習活動における学びと評価をめぐる教授・学習論的検討 関西大学高等教育研究 , 7, 79-90.
山村 豊・成家 篤史（2014）. 初年次教育における合宿研修の効果――平成 25 年度帝京大学初等教育学科初等教育コース新入生合宿研修の報告―― 帝京大学教育学部紀要 , 2, 217-230.
脇本 竜太郎（2013）. 大学適応感を予測する新入生研修の継時的評価 心理学研究 , 84, 429-435.

注

1　この答申では，グローバル化する知識基盤社会において, 学位の国際的通用性の担保するために,「学位授与」「教育課程編成・実施」「入学者受入れ」に関する 3 つの方針が策定された。換言すれば,「入り口」と「出口」, そして, その間をつなぐ「教育課程」とそれを支える「大学体制」の充実を図ろうとしたものと言える。初年次教育は，その中でも特に,「入口」の質保証を目指したものである。

2　先述したように，本学部は 4 コース，8 クラスから編成されるが, コース別, クラス別の検討は行わなかった。

3　Pre 調査，Post 調査における各項目の得点について，正規分布をなしているかどうかを確認するため, Shapiro-Wilk 検定を行った。その結果，すべての項目で有意水準が 5 ％以下となり, 正規分布に従うデータでないことが示された。そのため，今後の分析ではノンパラメトリック検定を行うこととした。

4　効果量 r は，水本・竹内（2008）に基づき，検定統計量 Z と人数から算出した。

5　効果量の基準は, 水本･竹内（2008）に基づき, $r \geq |.10|$（小），$r \geq |.30|$（中），$r \geq |.50|$（大）とした。